

# 岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報  
(第 140 号)

## 美咲町立旭図書館 移転OPEN

美咲町旭文化会館にあった旭図書館は令和 7 年 2 月 2 日 (日)、約 28 年間の歴史に幕を閉じ、令和 7 年 5 月 11 日 (日)、場所を旭地域多世代交流拠点「あさひなた」に移し開館しました。

この施設は旧小学校の校舎を利用し、図書館のほか美咲町旭総合支所、旭公民館、岸田吟香資料室、西川診療所と地域住民の「学び」や「暮らし」を支える機能が一体となった複合施設です。

建物の外観は当時の小学校の面影そのまま。建物内は廊下や壁・床・扉などが残されているところも多く、どこか懐かしさを感じる落ち着いた空間となっています。



【「あさひなた」外観】

図書館がオープンした当日は、吉備中央町図書館の移動図書館車の来館や読み聞かせ、ボランティアの方々によるブラックシアターや工作、また地元中学校の吹奏楽部の皆さんによる演奏会などさまざまなイベントを行い、町内外から多くの方が来館されました。新しく生まれ変わった旭図書館に「また図書館に来てよかった」「以前と変わらず、マンガを借りることができる」など開館を心待ちにしてくれていた人たちから嬉しい言葉をたくさんいただきました。



【移転オープンイベントのようす】

現在の旭図書館は約 31000 点の資料を所蔵しており、開架は以前教室として利用されていたフロアと廊下に面したフリースペースを合わせた場所で、本・雑誌・DVDのほか、マンガやCDなども配架しています。特にCDは所蔵数が多く、国内外のアーティスト、子ども向けのものや朗読CDなど幅広いジャンルがあり以前から熱心に利用していただいている方々に喜ばれています。



【フリースペース】

館内は窓が大きく、晴れた日には気持ちのよい陽が差し込み、「あさひなた」の名のとおり日向ぼっこをしているかのような明るく暖かな空間で読書を楽しんでいただけます。フリースペースは飲食が可能で、ちょっとした待ち時間などに飲み物を飲んだり、お弁当を食べたりとゆっくり時間を使ってもらうことができます。

昔ながらの雰囲気が残るこの図書館が長く地域に愛され、多くの方に利用いただける魅力ある場所になるようこれからも力を注いでいきたいと思ひます。

(美咲町立旭図書館 杉山 育代)

## 台湾・高雄と広がる図書館交流の輪

令和7年11月15日から30日まで、台湾・高雄市で開催された「2025 高雄城市書展」に、高梁市図書館として初めて参加しました。

この書展は、高雄市立図書館をメイン会場に、100を超える出版社や書店が集まる台湾最大級のブックフェアです。書籍だけでなく、映像・音声・展示・パフォーマンスを通じた多感覚的な読書体験を提供し、都市全体を巻き込む取り組みが特徴です。運行中の高雄ライトレール車両内での読み聞かせや、芝生広場でのマーケットなど、図書館の枠を超えた文化イベントが多数展開されていました。

開幕式では、李金鶯館長が「文学を超えた多感覚的な読書体験」をテーマに挨拶され、FOCASAサーカス団による華やかなパフォーマンスも披露されました。国際的な文化機関や出版関係者、作家らが集う中で、図書館が果たす役割の広がりを実感しました。

今回の高雄市訪問は、一昨年の岡山・高雄便就航をきっかけに、高雄市立図書館の李館長が高梁市図書館を視察されたことから交流が深まったご縁によるものです。このたびそのご招待を受け、11月15日・16日の2日間、現地で高梁市と高梁市図書館を紹介しました。

高梁市の紹介ブースでは、高梁市観光協会とともに天空の山城「備中松山城」や日本遺産「吹屋ふるさと村」など観光資源をPRしました。



[高梁市の紹介ブース]

猫城主さんじゅーろーの存在は台湾でも大人気で、写真撮影を楽しむ方が多く見られました。また、雛人形の布を使った「くるみボタン」づくり体験は行列ができるほどの盛況で、日本文化への関心の高さを感じました。

16日には、高雄市立図書館とドイツ国立図書館による協力意向共同声明署名式に立ち会いました。図書館が「自由と人権、知識を守る場」であるという理念のもと、国際的な連携が進められていることに深い感銘を受けました。さらに、亡命文書館の活動や外交官の異文化理解に関する講演を聴講し、記録や交流の重要性を改めて考える機会となりました。

午後には国際講座「隣の友人 岡山県高梁市」に登壇し、高梁市の魅力や図書館の活動を紹介しました。会場には「日本に行きたい」「高梁市を知っている」という方々が集まり、質問や意見交換を通じて温かな交流が生まれました。高雄市と高梁市は規模こそ異なりますが、「岡山」という地名や猫駅長のみかんちゃんと猫城主さんじゅーろーなど、意外な共通点も話題となり、会場には笑顔が広がりました。



[国際講座「隣の友人 岡山県高梁市」]

今回の書展への参加を通じて、図書館を起点とした文化交流の可能性を強く感じました。

日本文化を体験するツアーなども計画されており、今後さらに高雄と岡山、そして台湾と日本の文化交流が深まることが期待されます。

(高梁市図書館 上森 智子)

## くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館 おすすめ展示コーナーの設置

くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館では、令和7年度より利用者促進の取組として、新着資料のお知らせや、季節毎の特集展示に加えて、図書館1階にて「おすすめ展示コーナー」を設置しました。

このコーナーは、コロナ禍以降の来館者数減少の改善と、学生が図書館(本を読むこと)に関心を持つきっかけをつくるために設置したものです。お知らせ方法として、学内者用情報システムからのメール配信と、当館は、学外者にも利用開放していることから、図書館ホームページにも写真・展示内容(説明)・展示期間を掲載しています。

まず、学生が関心を持ちやすいテーマとして、映画化された原作(図書)と視聴覚資料(DVD)を並べて展示することを選びました。当館では、図書館1階のグループ視聴室にて視聴覚資料の閲覧が可能のため、並べて展示紹介することで閲覧増加にも繋がるのではないかと考えたのです。ちなみに、グループ視聴室はA・Bと2部屋あり、学内者は勿論、学外者も図書館利用券を発行していれば、開館時間中は閲覧可能です。

前期は、展示期間を令和7年4月1日(火)～7月31日(木)とし、ジブリ・アニメ・青春ドラマ・アニマル・音楽・コメディ・ファンタジー等、計14作品を利用者が見やすいようジャンル毎に分けて展示しました。春・夏らしい色合いで作品内容に合わせて飾りつけをし、展示作品とは別に、利用者自身のリクエストを受け付ける用紙やリクエストBOXも合わせて設置しました。また、この「おすすめ展示コーナー」をより浸透させるためにも、利用者自身が参加できる形をとった方が良いと考え、利用者が閲覧、もしくは借りた当館資料の中でのおすすめ作品と感想を記入する用紙や、その用紙を貼付する掲示板も設置しま

した。この掲示板は、利用者が当館資料を吟味する参考としても役立っています。



[前期展示内容] [感想・リクエスト用紙・BOX]

後期は、展示期間を令和7年9月8日(月)～令和8年3月19日(木)とし、ジブリ・サスペンス・ヒューマンドラマ・アニマル・音楽・ファンタジー等、計17作品を展示しました。秋・冬らしい色合いで作品内容に合わせて飾りつけも変更しました。また、図書館スタッフの一番のおすすめ(イチオシ)作品もあらすじを記して、丸テーブルに別置で目立つよう追加展示しました。



[後期展示内容] [おすすめ作品&感想 掲示板]

この「おすすめ展示コーナー」の設置は、展示されている視聴覚資料(DVD)や、その他の当館視聴覚資料を閲覧する学生が増えたことで、見事グループ視聴室の利用件数の増加にも繋がり、利用促進の効果が見られました。また、展示している原作(図書)に関心を持ち、借りる学生も見受けられました。

今後も、図書館の存在意義、図書館の魅力を伝えていくためにも、利用者が興味・関心を持てる色々な展示紹介を行っていこうと考えています。(くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館

村上 波)

## 笠岡市立図書館の展示と特集コーナー

笠岡市立図書館では、館内のいろいろな場所に展示や特集コーナーを設置しています。資料のパネルなどを展示した大がかりなものから、小さな特集をしたミニコーナーまで、展示の方法は様々です。もともとは、5か所程度の展示でしたが、現在は20か所以上になっています。きっかけは、「書架に本が入らない」とことと「コロナ禍」でした。

当時の書架を思い返すと、書庫入れや除籍が追いついておらず、本が整然と並んでいるだけで、利用する側からすると、ワクワク感のない図書館だったと思います。さらに、コロナ禍で、貸出冊数が減少し、「貸し出されない本」が館内に大量にあるという状況になりました。図書館への長時間の滞在が難しくなり、短時間で本を選んでもらわなければならなくなったことも特集コーナーの増加につながりました。

### ■展示について

令和7年度は、笠岡市立郷土館と笠岡市立竹喬美術館と連携した展示を行いました。笠岡市立郷土館出張展示「笠岡と災害」では、郷土館所蔵の資料の展示だけでなく、地震をテーマにした講座を開催しました。竹喬美術館の特別展「絵本作家 いわむらかずお」開催時は、複製画の展示や講演会の開催、スタンプラリーなどを行いました。どちらの展示でも、図書館に所蔵している図書や資料も一緒に設置したので、たくさん利用がありました。他には、児童相談所主催の「里親制度」パネル展や、教育委員会主催の「教科書展」や「発明くふう展」、がんパネル展などがあり、毎年恒例の展示になっています。館内に展示室はありませんが、壁面や展示用パネルを活用して展示をしています。

### ■特集コーナーについて

特集コーナーは、「今月の司書の推し本！」や「今日のおすすめ！この1冊」、司書がテーマを

決めて設置した特集、返却本からランダムに選んだ司書のおすすめ本のコーナーなどがあります。また、庁内から届いたポスターやチラシを使ってミニコーナーを設置することもあります。健康や片付け、料理関係の特集は、年代を問わず興味を持っている方が多いため貸出しも多く、常に補充をしないと本がなくなるということが度々あります。一つの特集につき数十冊から数百冊の本があるため、館内整理日に行っている特集コーナーの入れ替え作業は大変です。

### ■展示や特集コーナーの設置はいいことがいっぱい！

- ・展示内容によっては、図書館に来たことがない人の来館が期待できます。
- ・他の部署や機関との連携は、図書館だけではできない企画を実現できます。
- ・市役所職員の図書館に対するイメージが変わりました。「図書館は、不特定多数の来館者がおり、いろいろな人に情報を届けることができる施設」という認識を持った職員が増えました。
- ・蔵書が少ない分野の本を知るなど蔵書構成を把握でき、購入図書の選書につながっています。

苦肉の策で始めた展示や特集コーナーの設置ですが、利用者にはとても好評で、「本が探しやすくなった」とか「今まで読まなかった分野の本と出会えてよかった」など、嬉しい反響がたくさんありました。図書館としては、まだまだ課題が多い当館ですが、利用者からの声を励みに、少しでも市民のお役に立てる図書館となるように、これからも頑張っていきたいです。



展示【笠岡と災害】



【今月の司書の推し本！】

(笠岡市立図書館 徳山 佳代子)

## 新しい本で新年のスタートを

県内図書館共同企画「新春図書館福袋」に参加して数年が経ちました。総社市図書館では、おもに子ども向けに福袋をつくっています。1日15袋限定で、年が明けた最初の週末に用意しています。

総社市図書館の福袋の特徴といえば、まず新着本が入っていることでしょうか。新年の福袋にふさわしく、真新しい本を手にとってもらいたいという気持ちからです。

総社市内には書店が2店舗あり、年に数回、その書店へ職員が出向き、直接購入しています。もともと、自動車文庫用の本を購入するためだったのですが、福袋を始めたころから、その本をまずは福袋に使い、返却後に自動車文庫の本として使用するという流れができました。

書店で「こんなテーマの本を集めよう」「歴史の本を買ってこのテーマで福袋をつくろう」など、考えながら楽しく選書しています。「かわいいどうぶつ」「おいしい絵本」など、子どもたちに人気のテーマは福袋を複数つくっています。

本を入れる袋は、不織布の手提げ袋を利用し、赤い色で新年のおめでたい雰囲気を演出します。あえてゆるく閉じて中身が隙間から見えるようにしています。

福袋に、絵本は入っていますが、正直なところ、お話（物語）は選びにくいです。物語だと、福袋を手にとってくれないこともあるので。最近はお話を読む子どもたちが減っているように感じます…。

ちなみに春の子ども読書デー（子どもの読書週間行事）にも、「本のたから袋」を貸出しています。こちらでも書店から直接購入した新しい本を入れており、福袋との違いを出すために青い袋にしています。

令和8年の「新春図書館福袋」では、おとな向

けの福袋もつくってみようと、お試して12袋を用意しました。以前にもおとな向けの福袋をつくってみたのですが、テーマが刺さらなかったのか、置いた場所が悪かったのか、なかなか貸出に出来ませんでした。今回は「脳トレ」や「健康」など、少しでも興味を持ってもらえそうなテーマで、新しい本を集め、一番目立つ新着図書コーナーに置いてみました。そのかいあってか、すべて貸出されました。

福袋も毎年続くと、テーマがマンネリ化して、みなさんに喜んでもらえるか不安になることもあります。それでも、今年もあつという間に子ども向けの福袋は貸出に出てくれたので、ほっとしました。いろいろ吟味して選んでくれているのを見ると、やって良かったなあと感じます。普段は手に取らない本を読んでもらえるチャンスなので、おもしろそうなテーマをこれからも考えていきたいと思っています。



[子ども向け福袋]



[どの袋にしようかなあ]

(総社市図書館 赤木 郁子)

## 新春図書館福袋

和気町立図書館には、和気館と佐伯館の2館があります。福袋は、和気館が大人向けと子ども向けを各10袋、佐伯館が各8袋用意しています。今回で3回目となりますが、最初の年は、皆さん「これは何？」と立ち止まっておられたので、こちらから趣旨を説明すると、快く「じゃあ借りてみようか」と手に取っていかれました。

小さな子どもさんがお母さんに「これはなあに？」と尋ね、お母さんが我が子に「これはね」とやさしく説明をしてあげ、「じゃあ、私はこれ」「じゃあ、お母さんはこれにするね」と親子で借りていかれる光景は見ている方もとても幸せな気持ちになります。返却に来られた時、「すごく楽しめました！ふだん手に取らないような本が入っていて、子どもも私も楽しく読みました！」と目を輝かせて言うくださり、とてもうれしかったです。「来年も楽しみにしてますね」とそれ以降、毎年欠かさず借りていってくれるようになりました。

苦勞する点は、購入する本の数が限られていますので早くから準備をしておかないといけないこと。2冊目まではこのテーマにぴったりだと思っても、あと1冊がなかなか決まらなくて悩むこと。でもそこは司書の腕の見せどころでもあるので、手は抜けないぞと思いながら納得のいく本をぎりぎりまで選んでいます。

個人的に今回の自信のセットの1つに「おじいちゃん」をテーマにしたものがあります。最初に『じいじ、じーっ』を見た時、おじいちゃんやおばあちゃんをテーマにひとつ作ってみようと思いついたのが始まりです。『じいじ、じーっ』はやさしく孫を見守るおじいさんのお話です。ほかにおとしよりが出てくる絵本はないかと探していた時、目についたのが『ゆうたくんちのいばりいぬシリーズ』の最新刊『ゆうたの

おじいちゃん』。この時点で、おばあちゃんは次の機会に譲り、おじいちゃんに絞った結果、『とんとんとんひげじいさん』に決めました。寒い時期こたつに入って、おじいちゃんのひぎの上で、「ひげじいさん」の手遊びをしたりして、お孫さんと幸せな時間を過ごしてもらいたいと思います。

福袋の良さである「新しい本との出会い」。本の世界が少しでも広がってほしいとの思いを込め、借りた本を持ち帰り、家族で開ける時の笑顔を思い浮かべながら、司書がセレクトしたどれも自信のセットです。

### 【紹介した本】

- ①『じーじ、じーっ』 ホッシーナッキー・作絵/ポプラ社
- ②『ゆうたのおじいちゃん』 きたやまようこ・作/あかね書房
- ③『じいちゃんあそぼ!とんとんとんひげじいさん』 とよたかずひこ・作/世界文化ワンダークリエイト



【和気館・福袋特設コーナーの様子】



【佐伯館・福袋特設コーナーの様子】

(和気町立図書館 徳永 ミカ)

## 令和7年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告書

研修名：第111回全国図書館大会愛媛大会  
期日：10月30日（木）～31日（金）  
会場：愛媛県県民文化会館ほか

記念講演 トークセッション「読むこと 書くこと 生きるということ」

講師：白川 密成氏（四国八十八ヶ所霊場第57番札所栄福寺住職）・高橋 久美子氏（作家・作詞家）・田丸 雅智氏（ショートショート作家）

コーディネーター：岡田 有利子氏

セッションでは、登壇者それぞれの原体験をもとに、読書や表現との関わり方が語られました。本が身近にあった記憶や、読書が必ずしも身体的・感覚的に合うものではなかった経験、物語を通して人間の内面や社会に目を向けるようになった過程など、多様な視点が共有されました。その中で、「書くことから始まる読書もある」という言葉が印象的に示されました。楽しみながら書き、考え、表現する行為そのものが、読書への新たな入口となり得ることを示唆する内容でした。

**第1分科会 公共図書館「社会教育機関としての公共図書館の可能性～学び合い、共に楽しむ場を目指して～」**

基調報告として、文教大学人間科学部准教授の青山 鉄兵氏より、「社会教育機関としての公共図書館の役割を考える視点」と題した講演が行われました。社会教育を「うっかり学ぶ(偶発的学習)」として捉える視点が提示され、公共図書館が人と地域をつなぐことで、意図しない出会いや気づきが生まれ、循環型の学びへと発展していく可能性が示されました。

続いて、人間牧場牧場主・年輪塾塾長の若松進一氏より、「4つのコミュニティでウェルビーイングに生きる」と題した講演が行われました。地域における多様なコミュニティ活動を通じてウェル

ビーイングを実現している実践例が紹介され、効率性や制度に過度に縛られることなく、人の思いや関係性を大切にす姿勢の重要性が改めて確認されました。

その後の青山氏と若松氏のクロストークでは、経済効率や制度的制約にとらわれず、人の思い・関係・継続性を重視することが地域を動かす力になることが語られました。図書館は、そのためのつなぎ目として、専門職の知識と市民の思いを結ぶ場であり続けることが期待されるとまとめられました。

午後の事例報告では、佐川町立図書館・真庭市立図書館・丹波地域での実践が紹介されました。

佐川町立図書館地域プロジェクトマネージャーの大道 剛氏からは、佐川町立図書館「さくと」が、回遊性のある空間と柔軟な活動設計により、地域に活動の循環を生み出していることが示されました。

真庭市図書館振興室・中央図書館課長補佐（司書）の上杉 朋子氏からは、「あそび＝余白」を大切にした真庭市立図書館の実践により、利用者一人一人が考え、工夫し、関わる余地を残した学びの場が形成されていることが示されました。

たんば社会教育士コミュニティ代表・特定非営利活動法人丹波ひとまち支援機構スタッフの葛木伸一郎氏からは、社会福祉士として現場の課題と制度をつなぐ実践や、「みんなのとしょぶ」をはじめとする市民協働の取り組みが紹介されました。

その後のディスカッションでは、「あそこに行けば何かあるかもしれない」と市民に期待される場であることが、図書館の価値を高める重要な要素であるとの認識が共有されました。

本大会を通じて、公共図書館が社会教育機関として果たす役割は、今後はさらに広がっていくこと、そしてそれを支えるのは人と人を結びつける「つなぐ力」であることを強く実感しました。今後は、単発のイベントにとどまることなく、次の学びへと循環する企画運営を意識し、地域内外の人

材や団体を結び付ける視点を持って活動していきたいと考えます。また、司書・社会教育士・公民館職員・学校教員など専門職同士が連携し、それぞれの専門性を発揮しながら、地域の課題解決や文化創造に寄与する図書館づくりに、本大会の成果を反映させていきたいと考えます。

(瀬戸内市民図書館 小野寺 結)

### 県図協セミナー（第3回）に参加して

「学校図書館「像」の更新と公共図書館との協働」

講師：宮澤 優子氏

(伊勢市教育委員会教育メディア課 主幹)

期日：令和7年9月19日（金）参加者：46名

1人1台端末の普及以降、学校図書館の利用が減少しているという声を耳にします。図書館利用者の育成という観点から見ても、これは公共図書館にとっても大きな課題と言えます。

宮澤先生のご講演では、はじめに公共図書館は地域の情報拠点となるべき施設である一方、実際には約2割の市民しか「有効に使えない」という現状が示されました。学校図書館は、公共図書館の非来館者層にアプローチすることが可能であり、学校図書館が有効に機能することによって、図書館を有効活用できる市民への道筋を立てることが可能になる、とのお話がありました。

そのためには、学校図書館が求めているものと公共図書館が提供できるものを相互に理解する必要がありますが、現状ではそれが十分ではない場合も多いとのお話がありました。

現代においてはデジタル資料を扱わないという選択肢はなく、私たち自身もICTスキルの向上や知識の継続的なアップデートが求められています。また、読書バリアフリーの観点から、誰にとっても情報への入口となり得る場と機会を提供していく必要もあります。

一方的な「支援」ではなく「協働」を実現す

るためには、授業者が必要としている資料・情報についての情報を共有するとともに、学校図書館「像」をGIGAスクール時代の読書センター・学習センター・情報センターへとアップデートし、かつ共通理解を図ることが重要であるとされました。

学校図書館と公共図書館が協働できるポイントを数多く紹介していただき、これからの協働の在り方について改めて考える貴重な機会となりました。

(岡山県立図書館 住友 加奈子)

### 事務局からのお知らせ

#### ■異動調査

本年度も例年どおり異動調査を行います。所属・住所等の移動があった方は事務局までご連絡ください。また、入会・退会をご希望の方も併せてお知らせください。なお、様式変更をしておりますので、詳細はお送りしている通知をご覧ください。

#### ■令和8年度研究奨励金の募集

現在、令和8年度の研究奨励金の交付申請を募集しています。図書館に関する研究であれば、広く交付対象となります。皆様のご応募をお待ちしております。

申請期限：令和8年3月20日（金）

#### ■スキル向上応援事業

令和7年度より募集を開始した、スキル向上応援事業について、鳥取県立図書館へ視察に行った会員から応募があり、交付いたしました。現在募集中ですので、積極的なご応募をお待ちしております。

令和8年3月1日発行

〒700-0823 岡山市北区丸の内2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 大西 治郎

TEL：086-224-1269